

立場が変わると何が見える



～その2 ペット～

坂口 伊都



はじめに

このところの空模様は、予測不能。天気予報では雨と出ているのに、ここは晴れてたり、天気予報のアプリを見るたびに天気の表示が変わる。晴れているのに雨が降り出し、狐の嫁入りにしては泣き過ぎだろうというぐらいの大雨。最近の空模様は、女心よりも複雑だ。コロナ感染の拡大も大きなうねりになっていますが、皆さまお元気でしょうか。

今は回復していますが、私が体調を崩してしまいました。天井や壁が回って見えたり、頭の中が揺れている感じが続き、動いたら少し休んで頭のくらくらを落ち着かせないと動けなくなりました。87歳の母の買い物につきあっている間、私の方がへばって座り込み、生き生きと物色している母の姿を眺めていて、どっちが老婆なのかわかりません。自分の身体が90歳ぐらいになってしまいました。

身体が弱ると思考も高齢化するようで、ボロボロと抜け落ちる記憶、それに自分でも感心する程の失敗の連続です。この前も、シャンプー後にコンディショナーをつけると、何故かまた泡が立ちます。終えられないシャンプー状態に、しばしフリーズ。確か詰め替えを手でシャンプーとコンディショナーを間違わないように確認して入れたはずですが、間違っ妻変えてしまったとしか考えられません。心身が急速に老化しているようです。身体を壊すと、このような状態になるのだと知りました。

身体を壊したのは、児童養護施設業務に体力的についていけなかったことが理由です。50を過ぎてから、早出、日勤、遅出、宿直の変則勤務は私には荷重だったようです。残念ですが、辞職しました。今まで児童養護施設の暮らしを見聞きしていましたが、実際に体験すると、どこにもない独特な世界が広がっていることがわかりました。言葉で表現することは難しいですが、子どもと一緒に生活をする部分とそこにいない時間が職員にはあり、自分がない時間に起きたことを想像してみても臨場感を持たず、今からまた生活を共にする、コマ切れになった日々を過ごすことの大変さを知りました。生活と業務、関係性、体力、気力といろいろな事柄が複雑に絡み合っている場所で、この業務を続けている職員の方々を尊敬します。

仕事に慣れることで必死になっていた頃、我が家の猫との別れがありました。いつもニャーと鳴く子が鳴かなくなり、息が荒かったので、動物病院に連れていくと胸に水が溜まっていました。その水を抜いて、検査をすると「悪性リンパ腫」でした。寝耳に水で、そんな大病を言われる心の準備などなく、何を言われたのか理解できず、混乱しました。病名に自分の耳を疑い、まだ4歳の猫と結びつきません。猫の命が危ないってということを信じたくありませんが、待たなしの状況で、決断をしなければならなくなりました。平和な猫との生活に突如、稲妻が走った家族の話を書いていきたいと思います。どうぞ、最後までおつきあいください。

ペットは家族

我が家には、10歳を超えた老犬2匹と猫から目線の小池さんとの縁で、やってきた保護猫2匹がいます。娘が高校生の時に真剣な顔で、気になる保護猫がいるから引き取りたいと何度も諦めないで、1匹だけならと渋々了承したことが始まりです。トライアルのためにその1匹を迎えに行くと、子猫が2匹ゲージに入っています。「きょうだい猫で、保護されたからずっと一緒にいて仲良しなんですよ」と紹介され、これで1匹だけ連れ帰ったら、私達、鬼のようだと、諦めモードで2匹連れ帰りましたが、小さく鳴き声をあげる子猫の愛くるしいこと。すぐに家族全員がワクワク気分が変わっていました。

「名前どうする？」とこの子達との未来に思いを馳せます。娘が引き取りたいと言っていた雄ネコは「サン」、一緒にいた雌ネコを「キノ」と名づけました。

サンは甘えん坊で、警戒心がまるで見えず、誰が来ても近づき、撫でられたら喉を鳴らして、猫初心者を虜にするプロです。一方、キノは用心深く、何かあるとすぐに隠れてしまい、なかなか見つけられません。たぶん、キノの方が猫っぽいのでしょう。対照的な2匹ですが、キノはサンが人に甘えている姿を見て、気を許すように変わってきました。今では、名前を呼ぶと上機嫌でニャーと鳴きながらトコトコとやってきて、甘え、後をつけてきて撫でてとおねだりするようになっています。猫は、自分が愛されるに相応しい存在だと心得て、全く疑わないのだと感心します。

犬も猫も、それぞれ性格が違って、人間のようで面白いです。一匹ずつ、おはようと撫で、鳴き声の返事をし、食事をあげ、ペットトイレの掃除をしていると、猫や犬の方も「家族の一員」と認識しているように見えます。メダカも水槽に近づくと、私の方に向きを変えて、ご飯が欲しいアピールをします。言葉を話さない動物も、一緒に暮らしていると訴えたいことが伝わってきます。

娘は、自分を猫たちの母親だと言い、犬とは姉妹の関係だと言っています。だから、猫は私にとっての初孫になるそうです。その娘も大学生となり、大学2年の前期までは、コロナの影響



でオンライン授業で家に受けていましたが、2年生の後半からは下宿生活となり、娘が不在になると猫たちは、じいじとばあばを下僕にして暮らすようになりました。サンは夫、キノは私のベッドで過ごすようになりました。

いつもと変わらない日常、サンが今日も夫のベッドの上で寝ています。でも、何か元気がない？呼吸が苦しそう？と思っていたら、夫も同じように感じていたので、娘とも相談して動物病院に連れていきました。「どうしたのかな？すぐに元気になるよね」と思っていたら、入院と言われてしまいました。検査結果は悪性リンパ腫、青天の霹靂。年齢的に考えても犬が先に逝き、猫との生活になるのだろうと疑いもせず過ごしていた絵が、ガタガタと崩れていきます。サンはまだ4歳なのに、命の危機に直面。目の前の大きな岩に太刀打ちできない気分です。

友人に相談すると、「猫の寿命を尊重すべきだと思う」と言われ、祖母には「猫にそんなお金かけられないでしょう」と言われました。娘は「できる限りのことをしたい」と言い、夫は「サンだけそれをするのか？」と尋ねてきました。我が家には犬 2 匹、猫 1 匹がいます。他の子にも、同じ事がこの先できるのかと投げかけます。私は、サンができるだけ苦しめない方法をしてやりたいと感じました。

家族としては、サンにできる限りのことをしてやりたいという気持ちはありますが、簡単なことではないことも想像がつきます。治療をするにしても、しないにしても、辛い気持ちが残ります。もし私が悪性リンパ腫になったら、どうして欲しいと考えるだろう。サンに尋ねても、語ってくれません。何を選択しても家族のエゴになるような気がして、もやもやしたものが取れない感覚を覚えました。

覚悟を決める

まずは、医者話を聞いてから判断をしようとなりました。

「胸の水はたまり続けるので、水を抜かなければ一月程で死に至るでしょう。その度に水を抜くとなっても、それを繰り返す体力がどれくらい持つかわからないし、その度に費用は発生します。週 1 回で半年間、抗がん剤治療を投与する治療法が、サンちゃんにも負担が少ない方法だと思います。」

抗がん剤治療は、朝病院に連れていき、夕方に引き取りに行くという形です。費用も、かなりの額でした。抗がん剤が効きやすい部位で、4 歳とまだ若いことを考えると、抗がん剤投与を勧めると説明されました。もちろん、抗がん剤治療をしたら必ず良くなるとは言えないし、余命がどれくらい延びるかはわからないとも言われました。医者立場としては、命を救う方法を求め、全責任を背負えるわけではありません。ご家族で相談して決めてくださいと言ってくれますが、抗がん剤治療の選択肢が大きくなっています。抗がん剤治療を勧められながら、それは医師の立場としたら、サンの命を救う道を通る発言になるよなとも感じます。

また、娘と夫と私で話し合いです。

娘「できる限りのことをしてあげたい、バイトも増やす」

私「費用の事よりも、週 1 回半年間、私たちはサンを連れて通うことができるかどうか考えてみる方が先決でしょう」

娘「自分は下宿で、主になって動けないから、お願いすることになると思う。だから、父と母で決めて」

それは違う。何か納得できない。

私「サンの親はあなたなら、私達に判断を委ねるのはおかしいと思う。抗がん剤治療を始めるにしてもいつからならできそうか、あなた自身がどの程度動いていく覚悟があるのか、覚悟があっても半年通うことが可能なのかどうかを自分で考えて判断をして、治療するかしないかを決めて。私たちは、あなたが決めたことを全力で手助けする」

と告げて話し合いは終わりました。

それから娘には、いろいろな人の意見を聞けるようにしました。必ず同じ曜日に抗がん剤を打たないとならないのか、多少の前後は何とかなるのか、質問も一緒に考えました。基本はサンの体調が一番とのことでしたが、接種日が前後するぐらいは何とかなりそうでした。

時は止まってくれませんが、幸い水を抜いてからのサンは、元気に過ごせていました。このまま元気になるのではないかと思うほどでした。

娘と何曜日になら連れていけそうか、何回もシュミレーションして、抗がん剤治療に踏み切ることに決めました。娘は、下宿から家に頻繁に戻ってきて、大変だったと思います。どこまで続けられるか未知数でしたが、やれるところまでやってみようと走り出しました。

お別れ

サンを連れて動物病院へ行きました。1 回目の抗がん剤を打って2~3 日様子見で入院です。1 回目の抗がん剤治療で、サンの数値はよくなりませんでした。食欲もなく、呼吸も苦しそうなので酸素が濃い部屋に入って、入院が延びました。そして、次の 1 週間を待たずに 2 回目の接種をすることになりました。その説明を受けた時、サンに面会することができました。管を舐めないようにするため、首にエリザベスカラーという輪をつけられていました。食欲がないので、身体がやせ細ってガリガリです。

「サンちゃん」と呼びかけるとニャーと応えます。馴染みのある声だとわかっている様子です。サンは、撫でてと身体を私の方に寄せてきますが、ガラス越しで触れません。手を伸ばしてみても、ガラスの感触だけが伝わってきます。

2 回目の抗がん剤は効いたようで、数値が良くなりましたと報告がありました。食欲がないのは相変わらずです。やっと退院になりましたが、薬の数が多いのに驚きました。1 種類の薬でも、苦勞してあげたので、弱っている状態でこの量を飲ませられる気がしません。

家に帰ってきて、父のベッドや娘の部屋に行ったり来たりしていました。感染症の心配があるから、隔離をして欲しいと言われていたので、どの場所がいいのかなと様子を見てみると、父の部屋で寝始めました。そこに餌、水、トイレを置くと、いつもと違う設えで、自由に家の中を動けないことが、サンは嫌がっているように見えました。サンの姿は、前回帰ってきた時とは違い、元気がなく、痛々しくて、食べ物をあげようとしても顔を背けて食べようとしてくれません。薬が入っているから食べないのかなと、そのままチュールを口元に持ってきてても顔をそむけません。

キノは、サンが帰ってきた時に近づいてきましたが、その後はサンのそばに行こうとしません。以前は、2 匹が一緒にいることも多かったのですが、サンは近づいていく元気もなく、キノは警戒しています。キノには、サンとわからないのでしょうか。その 2 匹の様子を見てみると、寂しい気持ちになりました。

その後サンは、吐いて、失禁して、ますます弱っていきます。その姿を見ているだけでも辛いです。娘にも調子が良くないことを伝え、できるだけ早く家に来るように伝えました。娘は、医師に電話をし、薬を飲ませることと食べさせること、どちらを優先させたらいいかを尋ねていました。治療の方針を決める時は、人任せにしていたのですが、目の前で苦しんでいるサンを見て、必死になって動いていました。ここまで積極的に動くことに驚きです。

しかし、その努力も虚しく、娘が帰ってきたことを確かめたかのように、娘と夫に看取られ息をひきとりました。私は仕事で立ち会えませんでした。サンは娘のことを待っていたようです。私は、冷たくなったサンにお別れを言いました。娘と夫が、サンをきれいに洗ってくれました。苦しそうな顔をしています。キノにサンを見せると、シャーっと威嚇を始め、逃げていきます。キノが知っているサンは、そこにはいなかったのでしょうか。



亡くなったことを動物病院に知らせると、後日、お花が届きました。

「サンちゃんもご家族も最期までがんばって頂きました。心よりご冥福をお祈りいたします」

とメッセージが添えられていました。治療を始めてから、あっという間に逝ってしまった。何とか、サンの命を守りたいという気持ちが伝わってくる担当医でした。

娘は、ポロポロと涙をこぼしています。「できる限りのことはしたよね」と娘を慰めました。私は、娘の涙を見ていました。私も、悲しいし、寂しいし、まだ4歳だったのにという気持ちと、これがサンの寿命なのだろうという思いが私の中に同居しています。



サンが亡くなって、数日後夫が、

「いつもサンがベッドで寝ていたから、いなくなって寂しいな。また、保護ネコ引き取ろうか」と言い出しました。

夫からそんな言葉が出るなんて意表を突かれました。犬を飼いたいと言った時も、保護ネコを引き取ろうと言った時も最期まで渋い顔をしていた人だったからです。早速、娘に報告をしました。それで娘が喜ぶかなと思って伝えたのですが、猛反対されました。怒りすら感じました。サンが亡くなったことの整理をする時間が必要で、下宿で離れて暮らしているから余計に寂しくなるのでしょう。

キノは、サンがいなくなったことをどう感じているのでしょうか。いつものように名前を呼べば、ニャーと鳴きながらトコトコやってきて甘えてきます。甘えることが、増えたような気もしますが、サンちゃんを探している様子は感じません。それが何となく寂しく感じます。

